

七月総評

立花 開

繭として老後を過ごせなくもない

松下 誠一 東京都

繭とは、眠る姿だ。そして新しく生まれるための姿だが、煮込まれ絹糸に使われることも羽化に至らず終えることもある。進みながら止まる繭の姿は、命の時間からすこしづれるようを感じる。繭として過ごす外見はそのように見えるかもしれないが、いつでもどのようにでも変化する可能性と危険がある。

インコは首をかしげることばかり

あいしてゐるかな

あいしてゐるかな…

五月閉じ花 北海道

愛を信じたい、愛を感じたい。自身の心がインコとなつて主体と見つめ合つているよう。インコの愛を疑わない瞳を覗くことで自身の愛を求める姿、すなわち愛に満たされていらない心が浮き彫りになる。繰り返し「あいしてゐるかな…」と期待するのはいじらしく、しかし他意が混ざると浅ましくなる。

ビー玉は羊が眠る丘になる

金光 舞 埼玉県

ビー玉を空にかざしていた幼少期、たしかに生命体がいてもおかしくないような温みのある光が見えていた。すべての光が当たつて温かいビー玉がちいさな羊が眠るための美しい丘であつてほしい。なにものにも侵されない、ちいさくて優しい空間だ。

生まれた日のあなたに

金糸をめぐらせて

世界はすこし霞むのでした

石村まい 兵庫県

この世に生まれることで、その存在の重さによつてこの世は少し霞む。主体は生まれた「あなた」に「金糸」がめぐらされるのが見えた。他でもない主体が生まれた対象を愛おしく思つてゐるから。世界は、見方によつてどのようにも輝く。

吐く息のほっとけえきに似た部分

波津 ゆみ 神奈川県

そんな部分があるとは知らなかつた…。と信じてしまう力がある。日常に滲み出でてくるファンタジーのやわらかさは、実際にあるものとして言い切るほうが面白く、読者に謎の説得力を与える。これは、愛しい相手にのみ感じるものだということもわかる。何故かわかる、という力。

天の川に西瓜冷えてるからと

妻が髪を洗う

広瀬 心二郎 埼玉県

織姫と彦星の結婚生活だろうか。年に一度の逢瀬の川を西瓜を冷やすという生活のツールのように扱う面白さ。燃え上がるような恋も、生活が混ざりこめばそうなる。そして、それが良いのだ。洗髪という無防備な姿に、年に一度ではない日々を繰り返してきた安堵がある。

わたしがぜんぶ悪かつたですと
心から言えたら

来世きれいな檸檬

夏山 栗 東京都

そこまでしても現世は報われないのか、と思う。しかも成れるのは「きれいな檸檬」。はたして、「ぜんぶ悪い」と心から言うことの対価になつていてるのだろうか。主体は、本当は檸檬なんかになりたいわけではない。美しい存在のままでいたいのだ。誰かを糾弾するより、石を受けるほうが手は汚れないから。

人間の思春期を喰う悪魔くん
マシユマロ食べて窒息しちやう

秋毫 宮城県

人間の思春期は、甘つたるくてふわふわなのか。マシユマロみたい、ではなくマシユマロ食べてという描写が面白い。我々の思春期は、「悪魔くん」にとつてはもはやマシユマロそのものなのだ。魂でなく思春期を食べるところに、悪魔くんの詰めの甘い可愛らしさもうかがえる。

瞬きの度に他人に移る神

青星 ふみる 岩手県

いたことも気が付かないほどの一瞬に触れてくる神。神である、という認識によつて対象は神になる。一度の瞬きで他者へ移る神は、誰に信仰されているのだろう。私たちの心中には、濃度は違えど信仰心があり、その中で微かに息づいている。力の責任もなく誰かの願いも特に叶えず、現代の感覚のような軽やかな存在である。

熱帯夜羊が羊数え合う

野城 知里 埼玉県

暑くて暑くて眠れない夜に、眠れない羊たちが互いを数え合う。苦しいときに生まれた絆は、片方が抜け出したときに壊れやすい。どちらかが眠つてしまつたときに、残された側は何を思うのだろうか。「数える」という知性が必要なものができる個体が複数いて、夜に起きているということも、何やら不気味である。